

# 日本心臓病学会 和文誌の休刊にあたって

編集委員長 井上 博

学会と名の付く以上、どのような学会であっても専用の学会誌を持っている。学会誌の役目は、①研究成果の発表の場、②教育的な情報提供、③会員向けの連絡などが主たるもので、④臨床医学の学会誌であれば珍しい、示唆に富む症例の報告の場を提供することが加わる。本和文誌は長らく心臓病学会の学会誌としてこれらの役目を十分に果たしてきた。

心臓病学会自身が、臨床心音図研究会に源を発し、以後臨床心臓図学会(1982年3月)、心臓病学会(1987年10月)と名称を変えてきたことに伴い、その機関誌も名称を臨床心音図(Cardiovascular Sound Bulletin, 1971~1975年)、Journal of Cardiography(1976~1986年)、Journal of Cardiology(1987年~)と変えて来た。当初、これらの雑誌は英文または和文で掲載され、和文の場合には英文抄録が付されていた。これらの学会誌に掲載された心音図や心エコー図に関する論文が、数多く欧米の教科書に引用されてきた。例えばFeigenbaum著Echocardiography第3版の文献の10%以上を臨床心音図の論文が占めていた。これはひとえに編集委員長の坂本先生の獅子奮迅の活躍による(興味のある方は、日本心臓病学会出版委員会発行のJC語録Journal of Cardiology編集後記集、2012年を御覧頂きたい)。

グローバル化の潮流は学会誌の世界にも及び、研究成果は英語で書かなければ評価されないとの考えが優勢となり、2008年1月Journal of Cardiologyは英文誌とされ、和文誌である心臓病学会誌が発刊されることになった。和文誌に掲載されても海外の研究者の目に触れる機会はなく、せっかくの成果が日本国内のみにしか発信されないという限界がある。しかし、初めて論文あるいは症例報告を書こうという若い諸君にとって、最初から英語で書くことは至難の業であろう。それぞれの学問領域には固有の論文の書き方がある。考察の書き方にしても一定の作法がある。論文なり症例報告なりをまず母国語である日本語で書いてみて、指導者に手を入れてもらう。自身の経験で言えば、駆け出しの頃書いたものは真っ黒になり(当時の教授は鉛筆で手を入れて下さった)、自分の書いた文章は跡形もなく消えてしまっていた。このような訓練を経て論文、症例報告の書き方を学んでゆく。完成したら(ワープロやパソコンがなかった時代、論文なり症例報告を完成させることはかなりの労力を要した)、投稿する。すんなりと採択されるはずもなく、査読者からきつい意見をもらって、どう対応したらよいのか途方にくれることもある。何とか改訂し、指導者と相談して再投稿する。多くの場合はこの段階で採択されるが、時には再度の加筆、修正を要求されることがある。

この様に、駆け出しの頃には母国語ですら満足の行く論文や症例報告を書くことは難しい。基本的な訓練を受けることなく、いきなり英語で論文、症例報告を書くことは、「艤舵なき船の大海に乗り出せしが如く」と杉田玄白が蘭学事始で嘆息したことに通じる。このためには日本語で報告できる場が必要であるというのが、偽らざる想いであり、そのためにも和文の心臓病学会誌の存在意義はあった。

しかし、世の潮流は英語へ英語へと向かってゆき、2010年1月には症例報告専用のオンライン電子ジャーナルであるJournal of Cardiology Casesが発刊されるに及んで、本和文誌への投稿論文数は激減した(2003年には年間94本、2007年には74本あった投稿が、2008年51本、2011年29本に減少)。この様な状況下に四代目の編集委員長を引き受けることになり、何とか和文誌の分量を増やす工夫を色々試みた。例えば、学術集会の企画の中からこれと思われるシンポジウムやパネルディスカッションを企画物として掲載した。この様な努力と、年間3回の発行のため各号のページ数は何とか確保できるようになった。

それでも看過できない問題が生じてきた。心臓病学会規模の会員数の学会が機関誌を3種類発行することは、財政的に難しいということである。心臓病学会の年間支出の約45%を出版事業に費やすことは財政的体力の限界を超えている。これを打破するためには、冊子体での配布を止めてオンラインのみとする、冊子体を希望する方には実費を払っていただく、冊子体はFJCCのみに配布するなどの対策が検討された。

幸い、Journal of Cardiology (英文誌) や Journal of Cardiology Cases (症例報告) の海外での認知度も高まり、英文誌はImpact factor を獲得するに至り、投稿論文数は増加の一途を辿っている(JCは年間400本以上、JC Casesも350本以上の投稿)。和文誌のページ数を増やす努力がかえって費用を嵩上げすることになり、これ以上学会として3つの機関誌を維持することは困難との結論に至り、本号をもって和文誌は休刊することになった。既に評議員会、総会で承認されていることではあるが、会員諸氏にはこの処置を了承して頂きたい。

初代坂本二哉先生、二代吉川純一先生、三代鄭 忠和先生の各編集委員長が築き上げてきた本和文誌に休止符を打つことになってしまい、断腸の思いである。しかしながら、2つの英文誌が成功しつつある現状を鑑みるに、和文誌を休止してみるよい潮時とも思う。JC, JC Casesは元気一杯である。会員の皆様には和文誌に代わって、両誌を大きく育てていただきたい。かつて本学会誌掲載の論文が欧米の教科書に数多く引用されたように、JC, JC Casesに掲載された論文がこれからも数多く引用されるよう願って止まない。

これまで本和文誌を支えていただいたことに、この場を借りて編集委員長としてあらためて御礼を申し上げたい。

長年にわたる応援有難うございました。